

「邪宗の転者存命罷り在候処 氏子共帰服不仕候者如何可有御座哉 大切成場所ニ御座候故」これは元禄年間長崎奉行が幕府に対し、京都吉田神道訴状による諏訪神社宮司職の詮議において露見した付随事項に対する伺書の内容と思われる。元禄十五年三月の諏訪宮司改易事件は神職の配流と處払いの結果のみで具体的な嫌疑の内容は不明扱いだが「帰服していない氏子共」とは森崎神社を信奉する氏子とみてよいかと思う。現在までに県庁跡地において岬の教会堂や森崎神社に関する遺構は検出されていないが、教会堂に関しては疑いもなく、その資料も少なからず存在する。では、森崎神社に関してはというと、「長崎縁起略」「長崎略記」その他に散見される「杵崎大明神」「蛭子の社」「森崎権現」であるが、その中でも「長崎根元記」に記された「永禄之比迄」という表現は開港時に教会勢力によって破壊されたイメージが付きまとっている。これらにおいては教会廃絶後に森崎神社が現地で再建された様子は窺いしれず、諏訪社再興と同時に円山に勧請されたと解釈されている。しかし、「松ノ下ニ石之廟在 恵美須ヲ石ニ彫付ケ是ニ氏神トシテ」「西屋敷裏門上り坂之上ニ大キ成ル榎木在 此脇ヨリ参詣ス 後次第繁昌ニ付森へ続タルヲ片取森崎権現ト崇ム 其後大権現ト崇メ近年森崎大明神ト相成」と現地での隆盛ぶりの記述も見られることから開港後、町建により人口が増加した状況下で森崎神社は存在した可能性がある。フィゲレイドが教会堂を岬に建てた時点(1571)で森崎社が存在していたとしても天正八年(1580)から十五年(1587)の教会領時代に森崎社が隆盛することはなく、長崎町衆がキリシタンであった慶長十九(1614)年までは同様である。では何時県庁跡地にあったとされる森崎神社が参詣で賑わったというのか。もう一つ、跡地の時系列で漏れているものに糸割符会所がある。長崎会所の前身ともいえる糸割符会所は慶長九年(1604)にこの地のイエズス会カーサ内に置かれた。ここで日本商人とポルトガル商人との間に介在したのがイエズス会のプロクラドールである。両者にとってプロクラドールへの信は絶大であり、にわか信者であったろう会所商人も信仰を抜きに商取引の相手として接し、交誼を深めていたはずだ。教会堂が破却された後もこの地に残って当時のプロクラドールを務めていたのがカルロ・スピノラ(1564-1622)で1618年に市中で捕縛され大村の鈴田牢に移された後1622年の元和の大殉教で西坂において殉教した。商人の多くはキリスト教の棄教に対しそれほど抵抗は感じなかったと思うが、おそらく尊敬に値する恩人・友人が受難の末、信仰に殉教したとすれば、未だこの場所、教会跡の糸割符会所に出入りをする者として、詮議を受けない形でこれを追善供養することは至極当然の成り行きのように思える。確たる史料が存在する訳ではないが、県庁跡地森崎神社の成立は元和八年(1622)以降、諏訪神社建立の寛永二年(1625)、あるいは西屋敷開設の寛永十二年(1635)迄。森崎神社に祭られた恵比須はカルロ・スピノラであると考えられる。森崎大明神の解釈は慎重に行われるべきだが、長崎文化の形成や県庁跡地と出島の相関関係については、少なくとも跡地活用を図る立場にあるものは森崎の本質を理解する必要があると思われる。補記スピノラの後任はクリストファー・フェレイラである。文章がまとまり次第「県庁跡地とイエズス会の都市計画」について提出するので併読願いたい。

「県庁跡地とイエズス会の都市計画」長崎市の市章である五芒星(ペンタグラム)を思い描いて欲しい。星形の尖った先、頂角は36度であり、そこから伸びる2つの斜辺で作られる二等辺三角形は、斜辺と底辺の比率が必ずフィボナッチ(Phi)の黄金比1:1.618033988となる。出島はこれで出来ている。損壊の補修や水門をはじめとする増改修等で多少の誤差は否めないが、出島はおおよそ外周(南)233m、内周(北)190m、斜辺70mで、中心軸を引けば左右(東西)はシンメトリーな扇面(地紙・車網)形であり、先述の二等辺三角形を以ってはじめて扇型と言える。出島の東西斜辺を延長、収束して作られる交点は36度であり、大村町と平戸町の背割上、現在の長崎市万才町3-16と3-28の境に頂角(P)がある。出島の縄張りを行った人物は、県庁跡地〔森崎〕の外、南側海上に築地を築くため、森崎に中心軸を置いて築地外周円の中心点Pである扇の要を決定しているが、この中心軸は既存のものを応用したと推測できる。出島を形成する二等辺三角形の底辺は72度となるが、この底辺の長さ

a)229m で正三角形を作ると、西側から伸びる 60 度の斜辺は t ) 約 1800m で長崎市夫婦川町春徳寺(T)に至る。同様に東側からの 60 度斜辺は m ) 1111m で 26 聖人殉教地(推定地 M)に至る。寛永 11 年に考案された出島の縄張りは、岬の教会にあった T と M の 60 度の交点 X を知らなければ引くことが出来ない。60 度である交点 X は必然的に正三角形を森崎に生成するが、その成立は往時の 2 つの教会堂、「岬の教会」と「トードス・オス・サントス教会」、に対し地点 M が発生した慶長元年十二月十九日(G1597/2/5)となる。[距離について] 頂点を P とする二等辺三角形の底辺 a:229m の 1.618 倍は斜辺 b:370m、それを 3 倍すると m:1111m さらに 1.618 倍すると t:1797m になる(英字大文字は地点、小文字は辺) [推定地 M について] 現在の西坂殉教地は明治期に西道仙が提唱し、数か所の候補地の中から昭和 30 年代に採用された推定地である。本稿での数値はこれより北東に 70m ほどずれる結果となっているがロケーションの条件には適合している。イグナティウス・デ・ロヨラを中心として 1534 年に結成されたイエズス会は、ローマ・カトリックの中であって特異な、ルネサンス期の叡智を受けた人道科学的な、新興のキリスト教集団であった。ヨーロッパ圏内での布教が許されなかった彼らはポルトガル国王の庇護を受けながら東征し、インド、マレー半島を足がかりに世界図上極東の島国に至る。日本で布教を始めたイエズス会は、皇室や公家との接触が不調に終わり、戦国武士層や守護との接触に行動を移した後、暫くは芋づる式に信者を獲得することができた。しかし、本国との距離や内戦状態で政治的に不安定な日本の経済事情、予想外に費用がかかる日本人信者達にイエズス会の財政は逼迫し、布教活動と資金調達とは表裏一体となる。東洋全域を治めるインド管区の巡察師としてアレッサンドロ・ヴァリニャーノは 1579 年肥前有馬領口之津へ上陸する。戦乱の中で信徒と資産を守るため、自衛手段として実施した森崎の要塞化も、政局の変化に合わせて躊躇することなく解除するなど、ヴァリニャーノの情報収集能力とその分析、応用による臨機応変さは、ゴア・マカオ・日本と内外においてもいかに発揮されている。資金調達を目的として急遽決行した遣欧少年使節は成功裏に日本へと帰国したが、豊臣秀吉が発布した「バテレン追放令」は日本国内の多くの後援者と長崎の教会領を失い、結局安定した運営は望むべくもなかった。その間にもヴァリニャーノは布教の対象を知識階層から一般民衆へと転換し、簡易な順応が期待される適応主義を一層堅固に進めるのだが、日本を離れた間に托鉢修道会の侵入を許してしまう。この時、ゴアにあって巡察使の計るべき問題は托鉢修道会の排除と、会の存続に必要な運営資金、その財源となる日本管区自体が独自に身につけるべき魅力の創造となった。教皇ベネディクト 15 世の理解が得られるまでイエズス会巡察使アレッサンドロ・ヴァリニャーノは極めて異端に近い存在として認識されていた。極東であること、大陸から切り離された島嶼であること、そこに住む人々は寛容力が極めて高い特殊な民族性を持つこと、これらの特異な環境を以ってヴァリニャーノが期待したであろう日本のキリスト教の一端が森崎に収束されている。先人は幾何学的神秘性のコードを森崎に埋め込むことによってこの地を祝福し、長崎に日本キリスト教の聖地を創出したのだ。補記この情報が当時のイエズス会内部で共有されていたとは思えないが、歴代のプロクラドールは認識していたのではないかと思う。出島造成計画時には日本人協力者の存在を窺い知る残滓がある。